



大嶽豊成大和尚

龍源寺報



龍源寺二十二世重興大嶽豊成大和尚

大祥三回忌法要厳修



三回忌法要・拈香法語



三回忌法要・行道



智泉寺ご住職・田村泰宏老師



大般若祈祷会

六月十二日、当山恒規法要大般若祈祷会に合わせまして先住忌を厳修いたしました。前年の一周忌を上回る約百五十名の檀信徒参集のもと、十日町市智泉寺ご住職、田村泰宏老師より三回忌法要の導師を勤めていただきました。田村老師からは龍源寺先代とのいろいろな思い出をご挨拶のなかで語っていただき、あらためて先代の行状を思い起こすとともに、ますますの龍源寺の興隆を誓ったところでございます。人と人との出会いが全てを動かしていくというありがたいお言葉もいただきました。そしてそれを田村老師に伝えたのが先代だったとお話しくれました。この三回忌をまたつっきっかけとして山内一同精進してまいります。

龍源寺 「きやらの会」発足

平成二十九年度より、龍源寺「きやらの会」を発足いたしました。主にボランティア活動となります。入会希望の方は龍源寺までご一報ください。



津南学第六号へ寄稿

津南町における郷土教育や歴史や文化の利活用についての提言型の原稿を、という依頼をなじよんの担当者より受け、龍源寺副住職が「お寺と郷土の関係性について」という文章を寄稿しております。興味のある方は是非ご一読してみてください。

瀬下猛氏、「ショート黒松」連載

十月より、講談社週間モーニングにおいて、龍源寺報で長年イラストを提供して下さった瀬下猛氏が「ショート黒松」という漫画の連載をいたしました。瀬下氏は副住職学生時代の友人です。旧湯之谷村出身で十日町高校時代は野球部で甲子園にも出場いたしました。龍源寺住職晋山結制の折に発行された書籍や、地元曹洞宗青年会発行の妻有百三十三番霊場紀行等、様々なイラストを描いてくれました。瀬下氏の今後の活躍をご祈念申し上げます。



伽藍境内普請報告

清浄鎮火祭

(お焚き上げ法要) 厳修

十一月十九日、この日は今シーズン初の積雪のあった日でありましたが、地元檀信徒にお配りしたチラシの予定通り、お焚き上げ法要・清浄鎮火祭を厳修いたしました。かねてより不定期にお焚き上げは行っていました。近年は位牌や古塔婆、お札やお守りだけではなく、葬儀の際に発生する骨箱や門牌、枕膳、七本塔婆などのお焚き上げもお寺に依頼する方々が増えてきました。お寺でもあまりの量に対応に苦慮する事態となり、今年度より年に一回法要の日を設け、希望者はその当日に持って来ていただくようお願いいたしましたところ、大勢の方々がお見えになりました。お寺関係のものだけでなく、人形や写真など、



一般ゴミとしては出しづらい燃やすことのできるものを受け付けております。来年度以降も十一月の第三日曜日午後三時と決めさせていただきます。希望者の方には是非おいでください。法要への参加は任意でございますのでお気軽にどうぞ。

平成二十九年 度 寺子屋塾開講

八月十九・二十日 (土・日) と寺子屋塾を開講いたしました。今年度は三名のご参加がありました。龍源寺檀信徒以外のご参加もあり、大変有意義な時間をお寺も過ごさせていただきました。お寺はある種、非日常の空間です。坐禅・写経に集中して取り組むことで「三昧」という経験もできたのではないのでしょうか。感じとるものは人それぞれ。参加者の皆様に何か感じるもの、思うことがあればよかったです。来年と考えております。来年度も開講いたしますので興味のある方は是非参加してみてください。



赤山先生 遺徳碑を修復

龍源寺において幕末に開かれていた赤山義塾の高橋赤山先生を顕彰する石碑が龍源寺境内入り口にひっそりと立っています。長年の風雪に耐えてきた石碑ではございませが石碑の土台部分がいよいよもたなくなり、このままでは石碑倒壊の恐れがあるということで修復



赤山先生遺徳の碑



工事の様子

庫裏除雪用 井戸掘り直し、 水中ポンプ 入れ替え工事

龍源寺には井戸が境内に何ヶ所もございりますが、今年も二ヶ所工事させていただきました。庫裏横に設けてある井戸で、庫裏周辺の除雪用水として利用されています。手掘り井戸二ヶ所の掘り直しと水中ポンプ入れ替えをいたしました。豪雪から三百年を超える年月に耐えてきた龍源寺の庫裏でございます。引き続き大切に守っていき、次世代へとよい形で伝えていきたいと考えます。



井戸工事

境内アスファルト工事

経年劣化に伴い、かねてからの懸案であった庫裏前境内アスファルトの工事をいたしました。龍源寺檀信徒がお勤めの上越舗道さんによる工事です。およそ三十年前に土の地面から消雪パイプの設置とともにアスファルトの地面へと変わりました。時代の変遷に伴い、檀信徒が来寺することの多くなった境内でございます。伽藍ともども境内各所の普請にもつとめてまいりたいと思っております。



アスファルト工事

梅花流創立六十五周年記念奉讃大会

平成二十九年五月二十三日福井にて挙行された記念式典に参加してまいりました。両本山狛下導師のもと記念法要と震災慰霊法要が勤まり、清興においては南こうせつさんによるコンサートと、御詠歌の新曲発表がございました。普段の全国大会とは趣の異なつた今回の大会。非常に印象深いものとなりました。永平寺においては普段は禅師さまや皇族が通る時以外には開くことのない唐門を開けていただき、山門を通り山内を参拝させていただきました。両本山禅師さまのご参加や南こうせつさんの清興等、講員にとつては一生の思い出になるような大会であつたと思います。ここに報告申し上げます。



大本山永平寺法堂にて

平成二十九年五月二十三日福井にて挙行された記念式典に参加してまいりました。両本山狛下導師のもと記念法要と震災慰霊法要が勤まり、清興においては南こうせつさんによるコンサートと、御詠歌の新曲発表がございました。普段の全国大会とは趣の異なつた今回の大会。非常に印象深いものとなりました。永平寺においては普段は禅師さまや皇族が通る時以外には開くことのない唐門を開けていただき、山門を通り山内を参拝させていただきました。両本山禅師さまのご参加や南こうせつさんの清興等、講員にとつては一生の思い出になるような大会であつたと思います。ここに報告申し上げます。

て亡くした方々でした。そしてご自身も九死に一生を得た方々です。当事者の壮絶な経験を語り継ぐことは、生きること・死ぬこととはどういうことなのかを次世代に考えさせていくことでしょう。この度の旅で感じたことはきつと人それぞれ。その感じたことを今後どのように形作るかも人それぞれ。今ある命を大切に、そしてその命を使って何ができるのか。命ある限り自分なりに一生懸命生きていきたいところでございます。そしてそれが志半ばで命を失つた方々に報いることにもなっていくでしょう。今回法要を行った場所以外でももちろん大勢の方が震災の犠牲になっております。あらためて全ての犠牲者の冥福をお祈り申し上げます。



南三陸町防災庁舎前にて慰霊法要



大川小学校での慰霊法要



宮殿寺さま山門

東日本大震災慰霊法要の旅



相馬市での慰霊法要



相馬市・語り部さんのお話

十月三十日十一月一日、第八教区梅花講師範会の特別事業として、東日本大震災慰霊法要の旅をいたしました。今年はずうと七回忌。福島県相馬市・宮城県石巻市曹洞宗宮殿寺さま・大川小学校・南三陸町の四ヶ所において慰霊供養をつとめてまいりました。何よりも実際に震災を経験した語り部さんたちのお話には胸を打たれました。宮殿寺さまは昨年特派講習会の講師としてきてくださったご縁からお寄せいただき、法堂において法要がとまりました。供養とは何かを考えさせられ、参加者の死生観にも大きな影響を与えたように思います。語り部さんたちは皆、家族や親族を震災によつ

十三佛と年回忌供養について

葬儀の際、自宅の祭壇やセレモニーホールの祭壇に本尊さまとして十三佛を祀りますが、地元に限つていえば例外なく龍源寺所蔵の十三佛の軸をお貸ししています。この十三佛についてここに説明を試みたいと思います。

十三佛は文字通り十三人の仏さまがあらわされているわけですが、この仏さまは死者の追善供養のために初七日から始まる七七(四十九日まで)、百箇日、二周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌の十三仏事それぞれに割り当てられた仏さまなのです。最初から順に不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩(如来)、薬師如来、観世音菩薩、勢至菩薩、阿弥陀如来、阿閼如来、大日如来、虚空蔵菩薩となります。



如来、虚空蔵菩薩となります。もともとは中国の十王思想から発展したもので、いずれの仏さまも冥王たちの本地仏となっています。よつて中国においては十王(十佛)信仰であつたわけですが、日本では中世以降に三仏事が加わり十三佛信仰が定着したと言われています。

このように十三佛を考えるうえでは十王を抜きには考えられません。十王は中国における道教の影響で生まれた信仰形態で、冥界(冥土)で死者を裁く

十人の王で十仏事の成立にもなつてたてられたとも言われます。死者は初七日に秦広王、二七日に初江王、三七日に宋帝王、四七日に伍官王、五七日に閻羅王(閻魔王)、六七日に変成王、七七日に太山王(泰山府君)、百箇日に平等王、一周年に都市王、三周年に五道転輪王のところについて裁きを受けるといふもので十王経に説かれていきます。ちなみに十三佛の場合に於てがわれる冥王は、七回忌に蓮華王、十三回忌に祇園王、三十三回忌に法界王となります。

十王経は偽経(インドで撰述されたものではなく、中国で作られた仏典のこと)で、唐末のものと言われています。日本においては平安末期に増大した地藏信仰と強く結びつき(閻魔王の本地仏が地藏菩薩)、中国の十王信仰とはまた違ったものになつたようです。各集落における墓地に必ず六地藏や十王堂が建立されているのもここに理由があるでしょう。

日本における仏教信仰を考える場合には、インド・中国・日本三国の文化と各国の民族宗教(ヒンズー教・道教・儒教・神道な

ど)との結びつき抜きには考えられません。世界宗教たる仏教の一つの特徴として、各地の民族宗教や民間信仰との融合があげられます。これは排他的ではない、平和的という意味では長所かもしれません。仏教をわかりづらくしているという意味では短所といえるのかもしれませんが。時折私にお釈迦さまはそんなことは言わなかつた、というような旨のことをおっしゃる檀信徒がおりますが、三国の文化と民族宗教との融合形態を鑑みてみれば現状がよく見えてくるのではないかと思います。私たち禅僧が身につけるものでもそのようなのです。

インド由来のお袈裟、中国由来の衣、日本由来の着物を身につけているのです。この十三佛信仰もお釈迦さま由来のものではありません。縷々述べたようにいろいろなものが融合してできた信仰です。

信仰の形態はどうあれ、死への恐怖と、私たちが生きていく間に積み重ねている「罪」の存在がその背後には見え隠れしているのではないのでしょうか。現代でも普遍的に存在している生と死の問題がここに内包されています。

追善供養・三十三回忌について

供養という言葉は供給資養の略ともいわれ、敬意をもつて懇ろにもてなすこと、特に神々や祖霊、動植物の霊、尊敬すべき人などに対して供儀や供物を捧げること、またはそれによつて敬意を表す行為も意味します。また漢語としては父母を奉養すること、またその奉養する物品を意味するそうです。

追善とは善事を修し、供養を施して死者の冥福を祈る行為のことです。善事を修すとは、すなわち私たちの日々の営みに直結すること、供養することと日々の善事を修す生き方が追善ということになります。

追善供養とは年回忌供養に限らず、命日・盂蘭盆会・彼岸会などのお参りや法具・仏像・堂宇を作ることも追善供養とみなされ、古くは貧者に施行をする功德を積むという行為も死者の冥界での安穩を祈ることに結びついたといわれます。

民間信仰においては死者が先祖の霊魂、

いわゆる祖霊へと昇華していく通過儀礼でもあります。その実、現代においてもこの面が強く、三十三回忌をもつて完全なる祖霊、先祖の一員になるといふ意味合いがあるのだと感じます。ゆえに三十三回忌は吉事とみなされるのです。この津南町においても三十三回忌はほとんどの場合法事という形で営まれ、子孫が三十三回忌を営むことができる状況にある(子々孫々続いている、経済的にその力がある)というのも吉事としてみなされる一端のように思います。



普請

現在、龍源寺伽藍屋根の普請にむけて檀信徒のご協力をあおいでいるところですが、この普請という言葉は我々禅宗発祥の言葉でございます。

「一日なさざれば、一日食らわず」の言葉で有名な中国唐時代の禅僧、百丈懐海禅師は修行道場の運営にあたり、作務と呼ばれる労働を雲水(修行僧)に例外なしの全員参加を義務づけたと言われます。この全員参加の労働を「普く請う」と書いて普請と呼びました。現代においても盛んにこの普請という言葉は日常で使われていますが、元来はこのような意味で用いられていました。

禅宗で用いられた言葉でございますので、この言葉に内在するものには単なる肉体労働以上の意味が含まれます。それは心身を一丸とした開眼の作業であるということです。そのように考えますと、日常に使われるこの普請という言葉により深い意味が見出されてきませんか? 普請は心も体も費やすことで心の眼を開く修行になるということです。これはわかりやすくいうならば、自分なりに何かしらの「気づき」を見出す行動ともいえるのではないのでしょうか?

この度の龍源寺伽藍屋根普請も、菩提寺・檀信徒一丸となつた行として捉え、よりよい形で菩提寺を後世へと残していく、伝えていくものになっていければ幸いです。まさしく龍源寺檀信徒全軒に普く請う状況でございます。現段階においても大変なご協力をいただいている方々もでございます。この度のことを一つのきっかけとしてこの普請という言葉に参じていただければと思います。